

「レームを失脚させる何かいい策はない？ ハイドリヒ」

一九四四年七月二十日十三時。ここはノイエ・カールスラント帝都、ノイエス・ベルリン。その地下に建立された宮殿内の近衛親衛隊隊長室において、親衛隊隊長ハインリーケ・ルイーゼ・ヒムラー近衛大佐は憤っていた。

低身で身体の凹凸が少なく、黒髪のリョートカット。眼鏡をかけ、無愛想な顔立ちをより際立てさせる漆黒の軍服に身を包んでいるヒムラーは、机をトントンと人差し指で叩きながら愚痴を零す。

「聞いてくれる、ハイドリヒ。あのクソババア、性懲りもなくまた栄えある親衛隊のメンバーを、私に断りもなく突撃隊に引き抜いたわ！ いくら親衛隊が突撃隊の下部組織だからって、横暴過ぎると思わないかしら？」

カールスラント皇帝直卒の部隊である近衛隊は、大きく二つに分けられる。

一つは皇帝の矛となる、近衛突撃隊 (Kaiserliche Gardeoffizier Sturmtruppen)。もう一つは皇帝を護る盾となる、近衛親衛隊 (Kaiserliche Gardeoffizier Leibwache) である。

「ヒムラー大佐のお気持ちはよく分かります。私もレームの風紀を乱す数々の行為を、快くは思っておりません」

ヒムラーの暴言を眉一つ動かさずに聞き入っている女性。ヒムラーとは対照的に長身でスタイル抜群

の体躯を持ち、美しいブロンドのツインテールを携えた彼女の名は、ラインヒルデ・インゾルデ・オイゲーニエ・ハイドリヒ。階級は近衛中佐。宮殿内の警護を担当する、皇宮警察 (Kaiserliche Wachen) の長官である。

「そう思うわよね？ で、相談があるのだけれど。貴女の力で何とかレームをしょつ引けないかしら？」

「彼女が明確に法に違反してれば、動けますが」

「法に違反してるとかしてないだとか、そんなのは関係ない。罪をでっち上げてもいいから、あのクソ魔女を捕まえて欲しいのよ。貴女の権力を持つてすれば造作もないこと。違うかしら？ ハイドリヒ」

「つまりは、手段を選ばずにと？」

「ええ、そうよ。あの女を排除できるなら」

「そこまですわ！」

ヒムラーが断言した瞬間、現場を押さえるように隊長室のドアがバンと開いた。

「なっ!? 貴女は？」

ドアを開けた少女に心当たりのあるヒムラーは、その顔を見て焦燥の色を濃くした。

「突撃隊ですわ！ お姉様に対する陰謀を企てようなどと、わたくしが許しませんわ!!」

左腕にかけられた腕章をピシッと左指で持ち、少女はハッキリとした声で叫ぶ。

ウェーブのかかった髪で褐色の制服に身を包んだ彼女の名は、ハンナ・エルヴィーネ・フォン・ヴァ

イルバッハ。階級は近衛大尉。突撃隊長レームの副官である。

「ああ、何てことなの……。親衛隊期待の星であった貴女が、そんなはしたない制服を着て私の前に立ち塞がるなんて……」

ヴァイルバッハは伯爵家の令嬢で、ヒムラーが親衛隊の有力株として注目していたウイツチだった。そんなヴァイルバッハをレームに取られてしまったばかりか、レームに心酔する余り性格まで豹変してしまった。

嘗ての面影が皆無なヴァイルバッハに、ヒムラーはおでこに右手を当て、フラフラと軽い目まいを起こしてしまふ。

「事の一部始終は聞きましたわ！ 二人が謀略を画策していたことを、お姉様にお伝えしなくては!!」

「させない!!」

このままレームに告げ口をされるくらいならと、ヒムラーは護衛用にとっていたワルサーP38を抜き、ヴァイルバッハに銃口を向ける。

「何ですの、それは？」

「銃よ、見れば分かるでしょ？ このことは内密になさい。でないと、撃つわよ!!」

「フツ。わたくしにそんな脅しが通用すると思いで？ 撃てるものなら撃つてみなさい！ お姉様、大変ですわ！」

ヴァイルバッハはヒムラーを挑発するように、大声でレームを呼ぼうとする。

「うっ、撃つわよ！ 本当に撃つわよ!!」

威嚇のつもりだったが、通用しないならば最終的解決に移るしかない。そう思ったヒムラーは、手をブルブルと震わせながら、弾丸を発射した。

「フフフ。無駄ですわ!」

「なっ、なんですって?」

だが、撃ち放った鉛の弾はヴァイルバッハに当たらず、身体の前でフワフワと空中浮遊してしまうのだった。

「フフフ。わたくしの固有魔法はテレキネシス。銃弾を回避するなど、造作もないこと」

ヴァイルバッハの固有魔法テレキネシスは、念動系の一種で、あらゆる物体を浮遊させ、自在に操ることが出来る。対象範囲は自分の周囲五百メートルと、お世辞にも広範囲とは言えない。

それでもタイミングさえ合わせられれば、弾丸はおろか爆風でさえ捻じ曲げることができると、ヴァイルバッハは黒猫の耳と尻尾を出しながら自慢げに語る。

「何だい、何だい。アタイの知らないところで、随分と面白いショーやってるじゃないの」

そんな時だった。銃声を聞きつけて、一人の女性が近衛親衛隊隊長室に入って来た。

赤毛のショートヘアで、ヴァイルバッハと同じ褐色の制服に身を包んだ女性。彼女こそ、近衛突撃隊隊長エルズベト・ユリアーヌス・フォン・レーム近衛大将その人であった。

「おっ、お姉様!!」

ヴァイルバッハはレームの姿を視認するや否や、目をキラキラと輝かせながらレームに抱き付いた。

「おー、よしよし。アタイの可愛いハンナ。一体何があつたんだい?」

レームは自分の胸元で頬をスリスリさせながら懐くヴァイルバッハの頭を優しく撫でながら、密談の顛末を聞き出そうとする。

「はい、お姉様。実はかくかくしかじかこういうことがありまして……」

ヴァイルバッハはうっとりとした瞳で、自分が見聞きしたことを洗いざらい暴露した。

「ふーん。そりゃあ重大な反逆罪だねえ」

聞き終えたレームは、不敵な笑みを浮かべながらヒムラーとハイドリヒを見つめる。

「さあて、どうしよっかなー。アイツにチクろうかなあ?」

「っ!!? そ、それだけはやめて!!」

レームがアイツと口にした瞬間、ヒムラーは顔面蒼白で懇願を始めた。

「いい顔だねえ。んじゃあ、今からアイツに伝えて来るわ」

レームはニヤニヤしながら、ヴァイルバッハを抱き締めたまま隊長室を後にしようとする。

「いつ、行かせるもんですか! 銃が効かないというなら……!!」

こうなったら奥の手だと、ヒムラーは胸元で両手

を構え、精神を集中し始める。使い魔と融合し、ジヤーマン・シエパード・ドッグの耳と尻尾が生え始めたかと思うと、ヒムラーの全身は青白く輝き始めた。

ヴァイルバッハの固有魔法
「食らいなさい! 波動砲、発射!!」

そして全身を覆うオーラを両手に集束させ、レームとヴァイルバッハに向けて放つのであった。

「なっ、何ですの!!? この光は!!? わたくしのテレキネシスが!!」

咄嗟に固有魔法を発動させるものの、光球を捻じ曲げることは叶わず、ヴァイルバッハは驚愕する。

「クスクスクス。これこそ私が長年東洋魔術を研究した集大成、"波動"よ!!」

ヒムラーの固有魔法は波動。自身の魔力と空間中のエーテルを融合させる技で、それを集束した波動砲は、周囲に物理的被害を与えることなく、魔力ダメージのみを与える必殺技である。

基本的には対ネウロイ用の奥義だが、人間相手にもそれなりにダメージを与えられる。

「単純なエネルギーの塊である私の波動砲をかわすことなど……!!?」

てつきり負傷させられるかと思いきや、ヒムラーの放った波動砲は、レームの右手に見る見る吸収されていく。

「ふい〜。ごっそさん!」

レームは使い魔である灰色狼と融合し、余裕の笑みを浮かべる。

「そんなっ!? 私の切り札が通じないなんて!! 一体なんなのよそれは!!」

レームにかすり傷一つ負わせられなかったことに、ヒムラーはオロオロと狼狽する。

「アタイの固有魔法は魔力吸収。ネウロイ相手じゃ有効かもしれないけど、アタイの前じゃご馳走にしかないよ」

「くうう!」

レームを負傷させられなかったばかりか逆に力を与えてしまったことに、ヒムラーは地団太を踏んで悔しががる。

「す、素敵ですわ! それでこそわたくしのお姉様あっ!!」

涼しい顔でヒムラーの攻撃を防いだレームに、ヴァイルバツハは更なる尊敬の念を抱く。そして、鼻血を濁流のように流しながら、レームの身体に己の身体をうねうねと動かしながら擦り付ける。

「よし、よし。今日は大手柄だったよ、ハンナ。褒美として、今日はハンナの相手だけをしてやるよ!」

「真ですか!? お姉様、愛しております!!」

ヴァイルバツハは感激のあまり、恍惚の笑みを浮かべながら子猫のようにぴよんとレームの肩に飛び乗る。

「そーいうことで、アタイはハンナの相手をしなくちゃならないから、ここらで退散しておくよ」

レームは踵を返し、近衛親衛隊長室を後にしようとする。

「待って! マインカイザー 皇帝陛下にこのことをお伝えするのだけはどうか!」

もしもそんなことになってしまえば、自分は親衛隊から除隊させられてしまうと、ヒムラーは必死にレームを引き止めようとする。

「言っただろ? ハンナの相手をするから、アイツに伝えるヒマなんかないよ。アタイ自身も力をもらったし、今回は見逃してやるよ」

「ほっ、本当に!」

「ああ。その代わり、アンタたちも二度とアタイを失脚させようだなんて思わないこと。それでいいかい? ヒルデ」

ヒムラーは降伏したも同然だが、まだハイドリヒの意志は聞いていないと、レームは訊ねる。

「構わんよ。元からそのつもりだったしな」

ハイドリヒは顔色一つ変えず、レームの提案を受け入れる。

「へえ。相変わらず食えない娘だねえ。何もかもアンタが描いた筋書きだったってわけ?」

レームはハイドリヒの真意を汲み取り、ニヤリと笑う。

「勘違いするなよ。私は不正が嫌いなだけだ。貴様は正攻法で私が失脚させる!」

今まで表情一つ変えなかったハイドリヒが、不倶戴天の敵を前にしたように、レームをギッと睨み付ける。

「アハハ。楽しみにしてるよ。そんじやーね」

レームは軽快な大声で笑いながら、近衛親衛隊長室から立ち去るのだった。

「ハイドリヒ! まさか貴女!」

レームとのやり取りを見て、ヒムラーはハイドリヒに真意を問い質そうとする。

「ええ。ヒムラー大佐にお話があると言われた時から、ヴァイルバツハ大尉にその旨を伝えました。万が一が手段を選ばずにレームを失脚させるなどと発言した場合は、間髪入れず部屋に踏み込むようにと、イヤホンで連絡を取り合いながら」

「何ですって!? 私に逆らうつもりなの!」

「私が忠誠を誓っているのは、マインカイザー 皇帝陛下とカールスラントの法。法から外れた者に不正を以って臨むのは、私のユダエヤ人としての誇りが許さない」

「あつ、貴女だってレームが嫌いでしょ! だから私は」

「ええ。私がこの世で最も嫌うのは、レームだ。故に、私なりの流儀を貫くだけのこと。それでは」

ハイドリヒは深々と礼をし、近衛親衛隊長室を後にする。

「キイイ! どいつもこいつも!! こうなったら、扶桑から極秘に取り寄せた藁人形とかいう奴で、レームのクソババアを呪い殺してやるわー!!」

自分の最も信頼する部下であるハイドリヒにも見限られたことに、ヒムラーは頭を掻き筆りながら錯乱する。そして机の中から、藁人形を取り出すのだった。

「確かこれを深夜の二時に、釘で神樹に打ち付けられたいのよね。クスクスクス……。見てなさい、見てなさいよ、レーム！ 扶桑の呪術アイテムで、必ずや貴女を〜!!」

ヒムラーは藁人形を手を持ちながら、一人怪しい笑みを浮かべ続けるのであった。

(エルズベト・ユリアヌス・フォン・レーム。バイエルン王国の貴族階級出身。一九〇四年十一月二十八日生まれ。三十九歳。第一次ネウロイ大戦時、当時皇太子であらせられたフリードリヒ殿下の勅めで皇太子フリードリヒ連隊に入隊。皇太子殿下が皇帝にご即位された後は、そのまま近衛隊に所属し、今に至るか)

同日二十一時。ハイドリヒは皇宮警察長官室に籠もり、レームの評価シートを眺めていた。

ハイドリヒはカールスラント全ウィッチの詳細なデータを、評価シートとして記しているのだった。どのウィッチがカールスラントに相応しいか、国家の名譽を傷付けている者はいないか等を選別するために。

(奴は既に四十を迎えようとしているのに、外見は二十代前半にしか見えず、未だに魔力の衰えささも感じさせない。恐らく突撃隊員の魔力を、吸収し続けているんだろうな)

一般的にレームは同性愛者だと思われる。レ

ーム自身も公言しており、何人もの突撃隊員がレームと寝たと、嬉々として証言している。

だが、それは方便であり、レームの真意は若い突撃隊員の魔力を自分のものにするにあると、ハイドリヒは睨んでいる。

(分からん。一体奴は何のために、そこまでウィッチに固執している？ 権力の座にしがみ付きたいならば、わざわざ近衛隊を二分化する必要はなかったはずだ)

元々近衛隊は一つの部隊であった。それをレームが、攻撃専門の突撃隊と、護衛専門の親衛隊に分割したのだった。名目上親衛隊は突撃隊の下部組織だが、ほぼ独立した権限が与えられている。

近衛隊のトップとしての地位を守りたいだけならば、そんな回りくどいことはしないはずだと、ハイドリヒは首を傾げる。

(だが、何よりも反吐が出るのは、親愛なる皇帝陛下を「アイツ」などと呼び捨てにしていることだ。その不敬極まる姿勢だけは、決して許さん！)

そのレームの皇帝を敬わぬ態度こそが、自分が最も嫌悪する側面だと、ハイドリヒは改めて思う。同時に、そんな不屈者を何故皇帝陛下は長年側に置き続けるのだと、ハイドリヒの疑問は尽きなかった。

「レーム様。少しお話があるのですが」

数日後。地下宮殿の廊下を歩いていたレームは、清楚な身なりの女性に呼びかけられた。

「なんだ、誰かと思えばエヴァアじゃないか。どうしたんだい、藪から棒に？」

「はい。実はあの人のことに関しまして、ご相談が……」

深刻そうな顔でレームに話しかける女性。彼女こそ帝政カールスラント皇后、エヴァンジェリンである。

「アイツについてか。別に構わないよ」

「ありがとうございます。ここ数日、あの人の体調が優れないみたいで。私 গতামには気分転換に外出なさつたらと言うのですが、『兵士たちが日夜間わず戦っているのに、そんな悠長なことができるか!』と頑なに拒みまして」

「あー、分かるわ。アイツそういうところ頑固だもんな。多分アタイが言ってもどうにもなんないよ」

ノイエ・カールスラントに移住した際も、戦中に新たな宮殿を建てるなど不謹慎だと主張し、堅強で荘厳さの欠片もない宮殿とは名ばかりの地下施設の建設を推し進めたのは、他ならぬフリードリヒ皇帝自身。

以来、公務以外で外出することもなく、地下宮殿に籠ったままの生活を続けていた。

その姿をずっと側で見続けていたエヴァアは、あまりの不憫さに耐え切れなくなり、レームに相談を持ちかけたのだった。